(9) 出版事業　－ 支部出版事業の 50 年を振り返る －

北海道支部は、日本分析化学会の 7 支部の中で最も会員が少ない。にもかかわらず、様々の支部活動を活発に展開していることで知られている。特に出版事業の活発さは他のどの支部にも負けない。どうして会員の少ない北海道支部であのような活動ができるのかと不思議がられたり、あるいは羨ましがられたりしている。支部会員の少なさが会員間のつながりを強く、小回りの効くものにしており、出版事業のように編集委員と執筆者との連携や、きめ細かい配慮や忍耐を必要とする事業を可能にしているように思われる。

これまでに支部として出版してきた本は以下の 6 冊である。増補版や改訂版などを含めて、編集委員名と執筆者数を以下に示す。

１）分析化学実験

分析化学実験(化学同人)　1964 年 9 月、同増補版　1965 年 9 月

編集委員：神原富民（北大理）、木村道也（北大薬）、永山政一（北大工）、松前鼎一（北開試）

執筆者：67 名

新版分析化学実験(化学同人)　1971 年 3 月、同増補版　1978 年 12 月

編集委員：青村和夫（北大工）、神原富民（北大理）、木村道也（北大薬）、永山政一（北大工）、西村雅吉（北大水産）、佐藤俊夫（北開試）

新分析化学実験(化学同人)　1989 年 11 月

編集委員：那須淑子（北教大）、渡辺寛人（北大工）、齋藤和雄（北大医）、吉田仁志（北大理）

執筆者：58 名

２）　水の分析

解説水の分析（化学同人）　1966 年 8 月発行

編集委員：　阿座上信治（東洋高圧）、蟇目清一郎（北大理）、永山政一（北大工）、那須義和（北大工）、西村雅吉（北大水産）、多賀光彦（北大理）、吉田仁志（北大理）

執筆者：31 名

新版水の分析（化学同人）　1971 年 12 月発行

編集委員：　後藤克巳（北大工）、蟇目清一郎（北大理）、那須義和（北大工）、西村雅吉（北大水産）、多賀光彦（北大理）、吉田仁志（北大理）

執筆者：31 名

水の分析第３版（化学同人）　1981 年 4 月発行

編集委員：　蟇目清一郎（北大理）、川村静夫（苫小牧高専）、中谷省三（東日本学園大薬）、那須義和（北大工）、多賀光彦（北大理）

執筆者：27 名

水の分析第 4 版（化学同人）　1994 年 2 月発行

編集委員：　那須義和（北大工）、多賀光彦（北大理）、川村静夫（苫小牧高専）、都築俊文（道立衛生研）、田村紘基（北大工）、田中俊逸（北大院地球環境）

執筆者：34 名

水の分析第 5 版（化学同人）　2005 年 6 月発行

編集委員：　田中俊逸（北大院地球環境）、田村紘基（北大工）、都築俊文（北海道和光純薬）、工藤英博（北海道分析センター）、鈴木智宏（道立衛生研）、笹木圭子（九大院工）

執筆者：59 名

３）　**分析化学反応の基礎**（培風館）　1980 年 3 月発行

編集委員：藤本昌利（北大理）、那須淑子（北教大）、吉田仁志（北大理）、四ツ柳隆夫（東北大工）

執筆者：23 名

分析化学反応の基礎（改訂版）（培風館）　1994 年 10 月発行

編集委員：四ツ柳隆夫（東北大工）、阿部重喜（山形大工）、大関邦夫（弘前大理）、上舘民夫（北大工）、金野英隆（北大工）、中村　博（北大院地球環境）

執筆者：29 名

４）**膜と界面**（学会出版センター）　1990 年 10 月発行

編集委員：梅澤喜夫（北大理、現東大院理）、鎌滝哲也（北大薬）、渡辺寛人（北大工）、田村紘基（北大工）、長谷部清（北大理）、原口謙策（北開試）

執筆者：68 名

５）**環境の化学分析**（三共出版）　1998 年 3 月発行

編集委員：片岡正光(小樽商大)、高橋英明(北大院工)、乗木新一郎(北大院地球環境)、伊藤八十男(道立衛生研)、加藤拓紀(道環境科学研究センター)、小澤幸男(日鋼検査サービス)

執筆者：59 名

６）**演習で学ぶ環境**（三共出版）　2002 年 3 月発行

編集委員：乗木新一郎(北大院地球環境)、伊藤純一(北見工大)、加藤拓紀（道環境科学研究センター）、斉藤　健(北大院医)、笹木圭子(小樽商大、現九大院工)、佐々木胤則（北教大）

執筆者：37 名

新しい本を作る時は、企画から始まって、出版社との交渉、章立てや執筆者の選定と依頼など、初版を出すための苦労は計り知れない。我々の先輩たちが上記の本の出版を企画・実行し、ことごとく成功を収めたことについては、その見識の高さと実行力に対して心から敬意を表したい。一方で、出版後これらの本を維持していくための改訂もまた重要な作業であり、それをすることによってその本の信頼性が増し、長く発行し続けられる要因となっている。

私自身は、幸いにもこれまで支部の出版物の多くに著者として、あるいは編集委員として係わることができた。しかし、初期の頃の出版の経緯や編集に係わる事柄を知っているわけではない。ここでは、支部の 25 周年記念誌、35 周年記念誌に書かれている資料や本の前書き、書評等を参考にしながら、出版事業の初期の取り組みをまとめるとともに、私の関与した水の分析の編集作業の様子などをお伝えすることを中心にして、支部出版事業の 50 年を振り返ってみたい。

「分析化学実験」

支部の最初の出版物になったのが「分析化学実験」である。初版が発行されたのは 1964 年ということであるので、支部が設立してから 7 年目、神原先生が北大理学部に着任してから 2 年目のことである。支部設立直後のあわただしさから少し開放され、また人の移動もあったことから、支部に新しい事業を展開する必要と余裕が生じ、その一つとして出版事業が提案されたのではなかろうか。

神原先生は 25 周年記念誌において「分析化学実験」出版の経緯を書かれているが、それによると、その当時学生実験は謄写版刷りの印刷物を用いて行われており、毎回自らの手で刷り上げなければならないことや、そうして苦労して作成しても大学の教員としては何の業績にもならなかったこと、分析講習会でも同様な状況であったこと。そのため学生実験のテキストとしても使えるものを作りたいということで支部幹事会の議を経て支部編の実験書の出版が企画され、1963 年に編集作業に着手、1964 年に出版にいたっている。その後、JIS 規格部分を追加した「増補分析化学実験」が 1965 年に発行されている。さらに、1971 年には、旧版を改訂し、各種分析法の原理、歴史、応用例なども解説し、教科書的な色彩を取り入れた「新版分析化学実験」が発行されている。さらに、1978 年には JIS の改正部分を追加した「増補新版分析化学実験」が発行されている。

1986 年には、この増補新版を見直し、新たな分析化学実験を出版するための編集委員会が組織された。この時の改訂の経緯については支部 35 周年記念誌に那須淑子先生が詳しく述べておられるが、「利用されていない実験などを削りスリム化するとともに、内容についても近代化する必要がある。また、支部会員の世代交代も進んでいるのでこの際若い研究者に執筆の機会を開くことが望ましい。」との編集方針の基に改訂が行われ、1989 年「新分析化学実験」として生まれ変わった。

さて、新分析化学実験が上梓されてからすでに 15 年以上も過ぎ、そろそろ改定の必要な時にきている。出版企画委員会では、水の分析の改定が終了したのを期に、今年度から分析化学実験の改訂作業に入ることを決め、喜多村昇先生(北大院理)を編集委員長として、作業を進めつつある。

水の分析

水の分析の出版の経緯については、やはり 25 周年記念誌の中で那須義和先生が書かれている。各地で公害が問題になる中、水質分析の内容も複雑・多様化しているにもかかわらず、現場の技術者のレベルは未だ不十分であり、マニュアルどおりに操作すること

はできても、その意味合いや原理に対する理解は十分でないために思わぬ誤りをおかす恐れがあった。それは水の分析に関するいい教科書がないことにもよるとの思いから水の分析の出版を思い立ったようである。支部幹事会後の懇親会で、「分析化学実験」の提案者でもある神原先生に那須義和先生が提案したところ、すぐに賛同され、話の輪が周りの人にも広がっていって、その懇親会の会場で、支部の第 2 号出版物の具体化が決まってしまったというのだから、いかにも北海道支部らしい話である。1966 年に「解説水の分析」として発行された。水の公定法の移り変わりが速く、原子吸光法など水の分析法の変遷が激しいことに対応するため改訂作業が行われ、1971 年には「新版水の分析」が、また、1981 年には「水の分析第 3 版」が出版された。

それからほぼ 10 年目にあたる 1991 年、水の分析をめぐる情勢も大きく変わったことから新たな編集委員会を組織して「水の分析第 4 版」の改訂作業が行われた。初版のときから常に先頭を切ってこの本の出版と改定に情熱を捧げてきて那須義和先生が今回も編集委員長として改訂作業を進められていた。しかし、その那須先生が改定の道半ばで急逝されてしまった。多賀先生がその後をついで改訂作業を進められた。私がこの第 4 版の編集作業に参加することになったのは、多賀先生が那須先生の後をついで改定作業に奮闘されていたときである。その当時私は留学を終えて帰国し、次に何をするかも決まらず、従って、多賀先生にはずいぶん暇そうに見えたのであろう。夏休みの間に集まった原稿の査読をするから、君も加わってくれと言われ、その査読の準備のための原稿のコピーや会議のための場所の設定やお茶の準備が最初の仕事であった。夏の暑い中、土曜日は朝からほぼ 1 日中、査読に割り当てられた。この作業は、ほぼこの年中行われ、査読意見をまとめて著者へ修正や書き直しの依頼を行った。また、2 校正、3 校正と進み、ようやく全ての作業を終了し、発行となったのは 1994 年 2 月であり、その年の審議会では盛大に出版記念パーティーを開くことができた。この作業を通じて、本の編集作業の大切さと、大変さを体験することができた。

それからさらに 10 年後、水を取り巻く環境の大きな変化、環境基準の大幅な改定、分析手法の進展があったことから改定の必要性が高まり、2002 年、新たな編集委員会を組織した。週に 1 回のペースで編集会議を開催し、改定の方向付けから始まり、執筆者の決定、編集会議の日程調整と全ての作業をしなければならなかった。しかも、途中笹木氏が九大へ転任され、また鈴木氏はフランスへの短期留学があり、一時はどうなることかと心配したが、通信手段の発達により、査読意見のやり取りなどはメールで十分可能であったので、特に編集委員の追加や変更することなく編集作業を進めた。本の題名についても「新・水の分析」など幾つかの候補はあったが、化学同人としては、実績のある「水の分析第〇版」の手堅さを選択した。予定では 2004 年中に出版することになっていたが、実際には 2005 年 6 月に発行された。国立大学の法人化に向けた準備や、各組織の組織改革などの時期と重なり、執筆者も編集者も大幅に忙しくなったことが原因の一つであろう。

分析化学反応の基礎－演習と実験 -

本書の出版の経緯については支部 25 周年記念誌の中で藤本昌利先生が、例の名調子で書かれているので、筆者の拙い文章を読むよりは、そちらを参考にしていただければ幸いである。本書の題名、分析化学反応の基礎と言うのもユニークなら、演習と実験の両方を持つことは他に類がないであろう。当時北大工学部におられた四ツ柳先生の発案と聞くが、それを具体化するために、藤本先生を編集委員長に、吉田仁志、那須淑子各先生が編集委員として加わった。1980 年に初版が出版されたが、発案されてから実に 5 年間の歳月をかけ練りに練り上げたものであった。

この本の発案者でもある四ツ柳先生は、その後東北大学に移られたため、改訂作業は東北支部との合同で行われた。と言っても、お互いに行ったり来たりして合同の編集委員会を開くほどの資金があるわけでないので、編集委員会などは、年会の前後に行うなど工夫が求められた。二つの支部の協力の下に進められた出版企画は初めてのことであり、編集委員の方のご苦労はいかばかりかと察せられる。改訂版は演習書にふさわしく A4 版のサイズとなり、表紙も一新されて 1994 年に出版された。

膜と界面

本書は北海道支部で出版した本の中でタイトルに分析と言う文字を持たない最初の本である。と言って分析化学に関係のない本かと言うとそうではなく、分析化学の周辺に広がる分野に目を向け、将来の分析化学の研究の方向性を探ることが目的である。膜界面での分子認識や分離化学に焦点を絞ったものであり、その後の分析化学の発展の道筋は、本書が意図した将来の分析化学の進むべき道と近いものであり、本書がそういう方向を作り出す一つの要因になっているのではないかとも思われる。九州大学工学部の高木誠先生の書評には次のようにある。「本書の意図は誠に斬新であり、類書がない。今後の分析化学が目指すべき方向の一つを示す思想書、指導書とも見ることができる。研究室に供えるべき一冊である。必ず明日の分析化学を招く鍵になると評者は信じる。」と書かれている。

環境の化学分析

本書は本支部で既に刊行されている「水の分析」と姉妹品の関係にある。丁度地球環境問題がマスコミでも大きく取り上げられた時期でもあり、分析対象も単に水だけでなく、土壌や大気にまで広がりつつある時期でもあったので、分析対象を広げた環境全般の分析を扱うものが求められており、本書はそういう部分を補うものとして企画された。一時、韓国から翻訳本の発行の話しもあったようであるが、実現には至っていないようである。

演習で学ぶ環境

本書は、化学的手法によって得られた環境の様々のデータの解析について、実例を挙げて解析した演習書である。人類活動、大気環境、水環境、地圏に関わる環境データのほかに、幾つかの分析手法によって得られた分析データの解析法が実例とともに解説されてお

り、読者は解説を読み、演習問題を解くことによって環境への理解をさらに深めることができる。「環境の化学分析」に続く、支部 2 冊目の環境に関する本の出版であり、2002 年 3 月に出版された。化学や分析化学に関する演習書は各出版社から多くの種類が出版されているが、環境化学に関する演習書はほとんど皆無であり、他に例のない新しい出版物の企画に取り組んだ編集委員の挑戦には深く敬意を表したい。できれば改訂の作業を試み、さらにいいものにしていくことが必要と思われる。

本の出版、編集は、ある意味で無から有を生み出す作業であり、あまりコストはかからないが、時間と労力を必要とする。また、一人ではカバーできない広範囲の分野も支部会員の協力の下、多くの執筆者で分担することによって、本の刊行が可能になる。会員が少なく、従ってまとまりやすいことを最大の武器にして、北海道支部の特徴ある活動の一つである出版事業が今後とも受け継がれ、支部の発展、強いては分析化学全体の発展にも貢献することを祈念したい。最後に九州大学工学部の上野景平先生が「分析化学反応の基礎」の書評の中で次のようなことを書いておられることを紹介しておきたい。「なお、北海道支部では本書の刊行に先立ち、分析化学に関する数編の編著書を支部事業として刊行しておられる。これは、北海道支部が優れた人材を多数擁しておられるために可能なことではあるが、日本分析化学会における支部活動の一つの在り方を示しているものとして敬服しているしだいである。」

（北海道大学大学院地球環境科学研究院　田中俊逸）